
冷たくて静かな彼女

楓蘭 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷たくて静かな彼女

【Nコード】

N7954H

【作者名】

楓蘭 仁

【あらすじ】

男子には全く笑わない女の子、通称みーたん。そしてやる時はやる男、俺。そんな彼女と俺の青春ほのぼのストーリー！。

俺の高校の1クラスは男女合わせて40人クラスだ。男女比のバランスもすっかりとれていたりする。

「12番、さのやまと佐野大和。」

「へーい。」

机に突っ伏しながら俺は手をヒラヒラさせた。

「13番……14番……」

と出席確認は続いていく。教師ってめんどいねー。毎朝こんなことやってんだから。

「34番、とおのみか遠野美佳。」

「……はい。」

と小さな返事。

うちのクラス1会話が無い女の子。通称みーたんこと遠野美佳。女子との会話はよく見られるが、男子との会話はほとんど無い。男子が嫌いというわけではなさそうだが、苦手という部類には入るんだろうなー。と俺は思う。

そんな男子たちはみーたんが大好きだ。どうにかして笑わそうと毎日試行錯誤しているのだ。そんな事する暇があるなら勉強しなさい！というお母さんの気分がよくわかる。

そして、特に頭もいいわけでも無いし、スポーツが飛び抜けて出来るわけでも無い俺。そんな俺が男子連中に自慢出来る事がひとつだけある。

俺はみーたんの笑顔を一番近くで見た事がある。

ある日の放課後、空になった弁当箱を忘れて取りに行った。
その時、教室にいたのがみーたん一人だけ。
でも、別にチャンスともなんとも思わなかった。

「~~~~~」

好きな曲を口ずさみながら本を読んでるみーたんの前を通り、自分の机の横にかけてある弁当箱を回収。
そして、もう一度みーたんの前を通りまっすぐ教室から出ようとした。

その時、なんとなく、なんとなくだが声をかけてみたくなった。

俺は教室の扉から顔だけ出して

「あ、みーたん。」

「……………」

お互い目が合ったところで

「じゃね。気をつけて帰ってねー。また明日。」

それだけ言っと

「!？」

一瞬、細めな目をいつもより開いて

「……うん」

と返事をしながら…笑顔をくれた。

「!?!？」

今度は俺がびっくりして、なんか急に恥ずかしくなった。
走って帰った。

そんな放課後が一度あった。

「大和！お前も来いって！」
と俺の腕を引っ張る友人。

「いいーっつの！俺は！」

このクラスの昼休み恒例であり全員が公認しているゲームがある。

それは

（ゝあの子の笑顔を取り戻せゝついでに愛を取り戻せ！！）

というゲームだ。

いや、別にみーたん笑顔失ったわけじゃないからね。
そんで愛は全く関係ないからね。

と、ツッコミ満載のゲームだが、これが意外と人気がある。他の女子からだけ。

「んでね、みーたん。俺言ってやったんだよ！………」

今一人の男子が挑戦中だ。

結果は明らかだけど。

そして、周りから大爆笑が聞こえてきた。

だけど、みーたんは全く笑っていなかった。

「お、俺が、じゅ、17敗目だと…」

と笑いに自信があつたらし男子がまた散った。

確か総合的にはみーたんは120勝目だ。
不敗神話だ。すごいよみーたん。

そして昼休みが終わる頃には、みーたんは132勝目まで勝ち進ん

でいた。

今日は挑戦者なかなか多かったな！。

そして放課後、139勝目をマークしたみーたんは帰り支度をしていた。

俺は帰宅部なので帰り支度をする。

帰り道。実は俺の下校ルートはみーたんと全体の三分の一くらいまで一緒だったりする。

帰るタイミングが一緒になる事が珍しいので今日はラッキーだ。

後ろ姿から容姿端麗っぱいのがわかる気がする。

背中に少しかかるくらいの長めの髪。ピシッとした背筋。スレンダーな体。…後ろからはわからないけど少し細くて吊り上がり気味の目。

ヤバい、俺、ストーカーに目覚めるかもしれない……。
はっ！！いかにいかに。

と勝手に妄想していたところで

「あれ？みーたん消えた？」

20メートルくらい先を歩いていたみーたんが消えた。

……なんかテンションが下がった。

「美佳ちゃんよお？こついう状況でも駄目かい？」

不意に、聞こえてきた声。

気付いた時には俺は走っていた。

男三人な詰め寄られているみーたん。
一番みーたんに詰め寄ってるでっかい人。
左右で腕を組んでる子分×2。

ちくしょう。漫画じゃあるまいし。

「こんなに言っても駄目かい？俺って駄目かい？やっぱり駄目かい？」

うんあれだ。でっかい人がうざい。

「…………ごめん…なさい。」

目を合わせたくないのか、おどおどしてるのかわからないけど、うつむき加減のみーたん。なんか新鮮な反応だ。もうちと見てようかな…………いや駄目だろ！

と、みーちゃんと野郎共の死角になるところで俺は葛藤していた。

作戦を練ってみる。

今周りにあって使えそうな物

・ なんか落ちてた軟球

・ 反対側には積み上げられた空き缶の山

よし……

軟球↓空き缶の山に投げる。 ↓音が鳴る。

野郎共↓一瞬びびって空き缶の山を見る。

俺↓その隙にでかい奴に不意打ちキック。

でかい奴↓沈む。

子分×2 ↓取り乱す。

みーたん↓俺に助けられる。

そして、ハッピーエンド。

……完璧だ……

よし、実行だ。

早速、軟球をヒョイ、と持ち。

「うーし…、いけえ！」

小さな掛け声と共に軟球を投げた。

ヒューン…
と山なりに弧を描き、

ガンッ！

「痛っ。誰だこらあ！？」

でかい奴の頭に当たった。

作戦失敗。

「出てこいこらぁ!!そこにいんだろが!!」

でかい奴がどんどん近づいてくる。ピンチ、俺。

「うつさいわぁ!!静かにしろやガキがぁ!!」

ガラガラガツシャーン!!と空き缶を派手に崩しながらホームレスが出て来た。
すっげー状況だ。

全員がホームレスを見る。みーたんも見てる。いやそりゃびびるわ。

「うおるあぁあ!!!!」

と言いながら俺は駆け出し、当初の予定通り、でかい奴に不意打ちキックを決めた。

バゴオッ!!と音と共にわき腹にキックが直撃し、

「ぐほおっ!?!」

と叫びながらでかい奴はすっころぶ。

「つとと…、うし！」

バランスよく着地しガッツポーズ。

そのままみーたんの手を無理やり掴み、

「みーたん！走るよ！後はハッピーエンドだけだから！」

「……え？」

しまった。つい口に出ちゃった。

「てめえ！！よくも俺の子分の告白を台無しにしてくれたなあ！！！」

と子分（右）がキレだした。

いや、お前のほうがえらかったんかい。

「いってゝなこのやろー…」

まずい、でかい奴が立ち上がった。

俺は本格的に逃げる体制に入り、

「みーたん、ダッシュ！！マジで！本気と書かなくてもマジで！」

「…え？…うん。」

俺はみーたんとものすごいスピードで逃げ出した。

とりあえず俺んちに最短ルートで逃げ込んだ。ベツニヤマシイコト
ナンテナインダカラー。

なんだかんだで俺の部屋に上げてしまった。冷静になって考えたら
すげーことだ。ざまーみる。クラスの男子。

「まー…、帰りは送ってくよ。しばらくはうちでゆっくりしてくれ
い。」
なんか思ったより言葉が自然に出た。俺は本番に強いのかもしれな
い。

「……ありがとう、大和くん。」

「あつ、い、いや……」
だめだ。帰宅部が本番に強いわけなかった。

てか、

な、名前読んでもらった。
異常に嬉しい。まさかのホームレスの介入があったことより嬉しい。
あ、そーだ。

「みーたんも大変だったと思うけど、今思い出すとありえないことの連続でちよっとおかしかったかもしれない。俺。」

少し、思い出して笑ってしまった。

「……ふふ。」
とみーたんも目を細めて、手を口に当てて笑った。

ん？笑った？

みーたんの不敗神話に傷を付けた男、俺。しかし公式な記録じゃないため、幻の一勝となる。ちくしょう。

「……みーたんの笑った顔俺二回目だけどさ、やっぱり、き、綺麗だし、すっげー、か、かわいいと思うよ……」

恥ずかしいけど思い切ってぶっちゃけてみた。大丈夫だ。今の俺のテンションなら何言われても傷つかない。

「とつても、とつても嬉しいよ、大和くん。」

にこり。と今までで（三回目だけど）一番俺が溶けそうな笑顔を見た。

み、みーたん。ま、まぶしすぎる。

ぼつり、ぼつりと話しているうちに結構暗くなった。そろそろ送るよ。と申し出ると、うん。と短い返事が返ってくる。

とりあえずみーたんの家の前まで送ってあげた。

「…ありがとう大和くん。」

「い、いいってことよん。」

くそ、名前を何回か呼ばれても耐性ができない。

「また、明日。」

とみーたんが家に入って行こうとした、

んー…よし。

「みーたん。」

少し距離があるが呼びかけてみる。

「……？」

クルッ、と振り返り不意に目が合う。

「俺、みーたんの笑顔が大好きだ。」

言っ
て
や
っ
た
ぜ
……

「……私は、大和くんが好き。」

ぐはあ
ああ
……

し、しかし一歩大人の対応で、

「……笑顔だけじゃなくて全部、大好きだよ。美佳。」

「や、やだ。大和くん…もお！」

そう言っ、みーたんは家に入っ、ていっ、た。

みーたんは普段、冷たい。そしてとっても静かだ。それでも、心の底からあつたかかった。

この日、俺は恥ずかし過ぎて夜もなかなか眠れず、謎の腹痛に襲われた。

次の日、前日にどんなことがあるかなかろうが、朝はやってくる。

みーたんもみーたんで結構緊張してたが、特に昨日の事には触れずに昼休みをむかえた。

（あの子の笑顔を（以下省略）

また始まった…

最悪なことに俺は今みーたんの目の前に座っている。
そう、俺が引っ張り出されて、俺がみーたんを笑わせるはめになっ

た。

「あんなに嫌がってた大和が今みーたんの目の前に！！果たして笑顔は取り戻せるのかぁ！！」

俺を引っ張り出した張本人の小僧が周りを煽っている。後で覚えとけよこの野郎。

「えーと、…じゃあこんな話を…」

「おお！？大和はトークでいくみたいだー！！」

ちょっと黙つとけ、がきんちよが。

「…昨日の、帰り道での話だ。」

周囲がうんうんと頷く。

みーたんはじつと俺を見ている。

「…ある、結構、いやかなりかわいい女の子が男三人に詰め寄られていたんだ。」

みんなはそれでそれで！？と聞き入ってくれていた。

「女の子も嫌がってたみたいだった。だから俺は女の子を助けようって考えたんだ。」

おおー！男だねえー！とか聞こえる。

「詰め寄ってた一番でかい男に攻撃して、その隙に女の子と逃げるつもりだった。作戦としては、まあ不意打ちだけど、隙を作るには十分だと思ったんだ。」

ふむふむ。それでそれで！？
なんてのりのいいクラスだ。

「…不意打ちは…成功した。わき腹に思いつきり飛び蹴りいれた。結局気絶はしなかったけど、逃げる時間は十分あった。」

大和かつけえ！大和くんすごい！
いやそれほどでも。

「それで、女の子は守れた。……だけど、大きな代償があったんだ
…」

教室がシン…と静まり返った。

「……足、捻挫してた。」

「ぶっ、あは、あはははは。」

とみーたんが笑うのを引き金に、

教室が笑いに包まれた。

そして、

「み、みーたんが笑ってる！！？」

とクラスメイトが気づき、どよめきが走った。

140戦139勝1敗

こんどこそ俺は不敗神話を終わらせた。
その日はみんながいい笑顔だった。

次の日、俺は男子から殺気を浴びる存在となった。

四日後、みーたんは5連敗を更新する。

俺はそんなみーたんに、連勝記念でその日に

告白した。

F
i
n

（後書き）

ノリで書き上げた二作目です。お読みくださった皆様ありがとうございます。前作共々、ご感想をもらえればとっても嬉しいです。それでは、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7954h/>

冷たくて静かな彼女

2010年10月10日07時53分発行